

「橋」の美を読み解く

今回より、誌面講座「「橋」の美を読み解く」が新しくスタートします。

著者・紅林章央氏は、長年、橋梁技術者として活躍しながら、「橋」について多方面で語ってきました。「橋の美しさは構造にある」と考える著者に各回、技術的、歴史的側面から読み解いていただきます。

浅草から水上バスに乗り、日の出ふ頭まで1時間弱の隅田川のミニクルーズ。船中には橋を説明するアナウンスが流れ、蔵前橋、清洲橋、永代橋、勝鬨橋と次から次に異なる形の橋が現れる。「橋の展覧会」と呼ばれるのも納得できるラインナップである。一般の人が日常の生活の中で、橋を横や下から見る機会はめったにない。船に乗ることで、橋にはさまざまな形があることや、構造的な力強さ、そして美しさにはじめて気付いたという方も多いと思う。

建築といえば美しさが求められるが、土木構造物では設計に当たって安全性や経済性が重視されるものの、美が優先されることは少ない。その中であって橋は、美も求められる特異な土木構造物といえるのかもしれない。その美しさ故、多くの文学や絵画に登場してきたのだと思う。戦前には「橋梁美学」なる言葉もつくられ、大学で講義され、メディアで論じられもした。かつての橋梁技術者達は、橋に美を追求して設計を行っていた。

今回から、江戸時代から戦前まで時代を追いながら、橋の構造が進化により「橋の美」はどう変わり、技術者たちはどのように演出してきたかを探っていきたいと思う。

江戸後期、葛飾北斎や歌川広重をはじめとする浮世絵師たちにより多くの橋が描かれた。巨大な構造物が少なかった時代にあって、橋は稀代の絵師たちにとって絵心をくすぐる二つとない画題であった。

明治時代になると、新しい構造である鉄橋が登場。橋は鑄鉄製のデザインパネルで美しく装飾され、和洋折衷の佇まいは文明開化の花形となった。明治後期には、米国留学から帰国した樺島正義によって、西洋の最新の構造やデザインがもたらされ、東京には、西洋の街角にあっても違和感のないような洗練された橋が架設された。

橋がその姿を大きく変えたのは、1923（大正12）年に発生した関東大震災の復興であった。稀代の土木技術者・太田圓三や橋の神様・田中豊の指導により、最先端の設計と技術を駆使し世界に冠たる400橋もの橋梁群が誕生。現代に通じるモダニズムデザインが登場した。

大正末期から昭和初期にかけては、我が国でもようやく自動車通行に対応できるよう、全国で鋼橋や鉄筋コンクリート橋の架設が活発化した。この時期に活躍したのが、米国留学から帰国した増田淳で、伊勢大橋や吉野川橋など生涯で60もの橋を設計した。これにより、地方でも近代的な永久橋をはじめて体感できるようになった。多彩な構造を持つこれらの橋の多くは、現在でも地方の街のシンボルになっている。

2000年以降、我が国の経済が停滞する中であって、橋の建設もコスト縮減が叫ばれ、以前のように景観やデザイン性について語られることは稀になった。まず高欄や照明などの意匠の費用が削られ、続いてアーチ橋や斜張橋などの複雑な構造が姿を消し、現在では設計や製作、施工が極端にマニュアル化された桁橋が完成橋の大半を占めるに至り、多様性が急速に失われている。橋の魅力とは、美しさとはどこにあるのだろうか、それをこの連載を通じて読者の皆さまと考えてみたいと思う。

2024年1月 紅林 章央



1959年、東京都八王子市生まれ。名古屋工業大学土木工学科を卒業後、1985年に東京都入庁。元東京都建設局橋梁構造専門課長。現在、公益財団法人東京都道路整備保全公社 道路アセットマネジメント推進室長。土木学会関東支部選奨土木遺産選定委員長。

著書に、『東京の美しいドボク鑑賞術』（共著、エクスナレッジ、2023.4）、『HERO（ヒーロー）東京をつくった土木エンジニアたちの物語』（都政新報社、2021）、『橋を透して見た風景』（都政新報社、2016）〈平成29年度土木学会出版文化賞受賞〉など多数。



「橋」	の	美	を	読	み	解	く
第	1	回					

浮世絵師に愛された橋



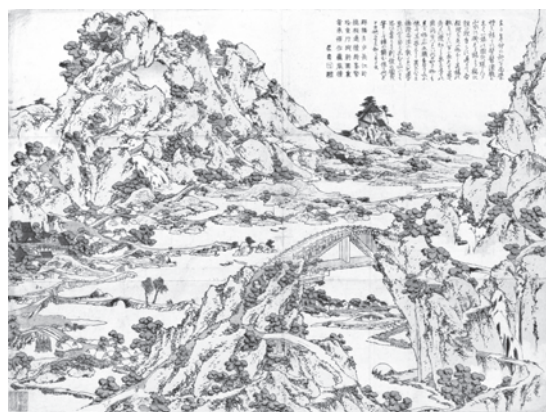
公益財団法人東京都道路整備保全公社

道路アセットマネジメント推進室長

くればやし あき お
紅林 章央

1. はじめに～橋梁美学～

「橋梁美学」。言葉が戦前につくられたくらい、「橋」は美が求められる特異な土木構造物である。多くの文学や絵画に橋が登場するのも、その美しさ故のことだと思う。時代を追いながら、我が国の橋の美は時代と共にどのように変わってきたのかを探っていきたい。まずは江戸時代から。



図－1 百橋一覽

2. 稀代の橋マニア 葛飾北斎

江戸時代後期になると、庶民向けに安価な絵画の浮世絵が誕生。葛飾北斎や歌川広重など日本の絵画史上屈指の画家たちが登場した。そして多くの橋の浮世絵が描かれた。

浮世絵師の中でも無類の橋マニアだったと思われるのが葛飾北斎である。橋好きを如実に表しているのが、夢に出てきた橋を1枚の絵に収めたといわれる「百橋一覽」(図－1)。

実際、江戸時代に存在した構造もあれば、全くの空想の構造もある。橋を生業として橋巡りを趣味にしている私でも、橋が100も出てくる夢を見たことはない。北斎は江戸本所、現在の墨田区亀沢の生まれで、周辺には隅田川の両国橋をはじめ、多くの橋が架かっていた。生来の橋に囲まれた環境が、稀代の橋マニアをつくったのかもしれ

ない。

北斎は『諸国名橋奇覧』という、全国の珍橋奇橋を描いた11橋からなる連作も遺している。

具体的には、東京・亀戸の「かめみど天神たいこばし」、岐阜・飛騨と富山・越中の国境付近にあった「飛越の堺つりはし」、山口・岩国の木造アーチ橋の「すほうの国きんたいはし」、難波の三大橋の一つ、「摂州天満橋」、船を並べ上に板を渡した船橋の群馬・高崎の「かうづけ佐野ふなはしの古づ」、江戸時代の国内最長の橋だった愛知・岡崎の「東海道岡崎矢はぎのはし」、福井にあった石と木の混合橋の「ゑちぜんふくゐの橋」、栃木・足利の肘木橋の「足利行道山くものかけはし」、他に京都・嵐山の渡月橋、愛知・三河の八つ橋、大阪の天保山等が描かれた。

橋には多くの構造形式があるが、まるで当時の

形式を網羅したかのようなラインナップである。

そのうちの1枚「かめんど天神たいこばし」(図-2)の橋は、現在の東京都江東区の亀戸天神にある心字池に架設されていた。池には人生になぞらえた、最も反りのきつい太鼓橋の男橋と平坦な平橋、緩い太鼓橋の女橋の3橋が架かり、人々はこれらの橋を渡って参拝した。描かれたのは男橋である。半円状の反りがかなり大きい木橋で、絵には橋を渡るというよりも、まるで梯子を上るかのような人が描かれている。

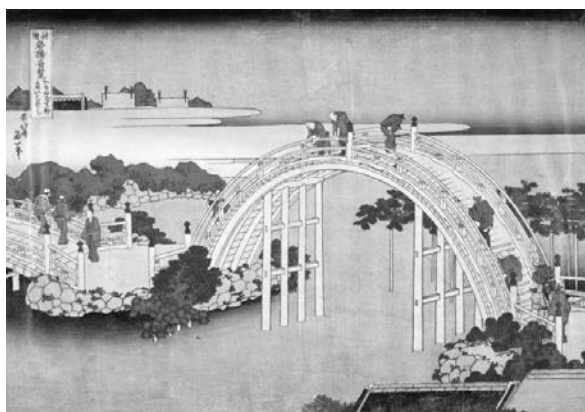


図-2 諸国名橋奇覧 かめんど天神たいこばし

現在の男橋は昭和24(1949)年に架設された鋼鉄製のアーチ橋で、勾配はきついものの立ったままで容易に渡ることができることから、絵は「北斎ならではの誇張」と、ある書物にも書かれていたし、私もそのように思っていた。

しかし、神保町の古本屋で手にした明治時代の2枚の絵葉書でその考えは一変した。1枚には北斎の描いた太鼓橋そのままの半円状の太鼓橋の上で記念撮影をする人々が(写真-1)、もう1枚にはまるで梯子を上るかのように橋を渡る人々が写されていた(写真-2)。北斎は誇張することなく、あるがままの橋を描いていたのである。

『諸国名橋奇覧』のシリーズで、最も有名な1枚が「飛越の堺つりはし」(図-3)ではないだろうか。谷に渡された布のような橋の上を、重い荷物を背負いながら渡る男女が描かれている。この絵を見た大抵の人は、「江戸時代といえどもこんな危険な橋があったはずがない」、「北斎は誇張



写真-1 亀戸天神男橋 絵葉書1



写真-2 亀戸天神男橋 絵葉書2



図-3 諸国名橋奇覧 飛越の堺つりはし



写真-3 明治時代の吊橋絵葉書

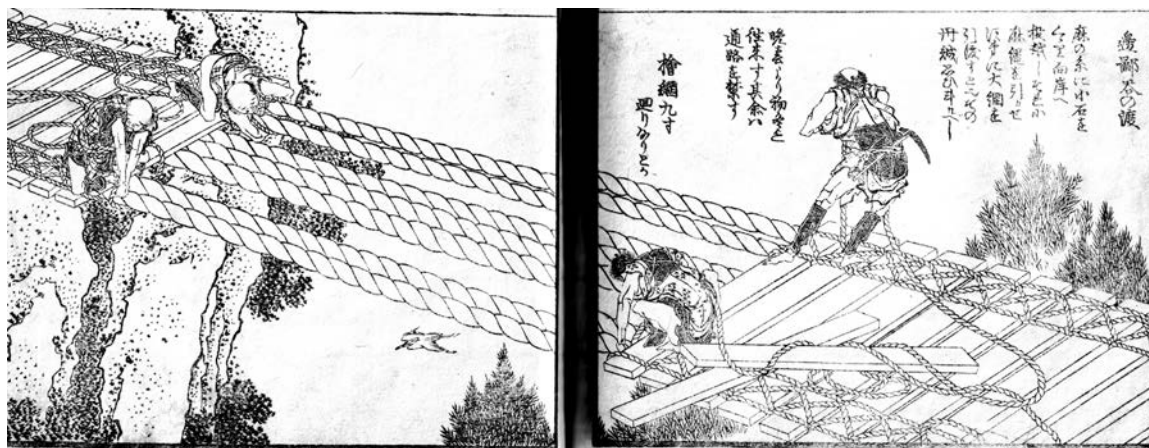


図-4 諸職絵本 新鄙型

して描いた」と思うであろう。実際この絵に対する美術評論は、現実離れのデフォルメした北斎ならではの世界と評したものが多い。

しかしまた古本屋で、飛越の堺つりはしとそっくりな橋の絵葉書（写真-3）を見つけた。危なげな吊橋は実在したのである。江戸や明治時代には、このような吊橋が全国の山間部の至る所に架けられていたのである。

図-4は北斎が描いた『諸職絵本 新鄙型』に収められた挿絵である。平行に渡した2本の蔦綱に木床版を括り付け、吊橋を架設しているさまを描いている。安全帯を付けた職人の姿や、右上には麻の糸に小石を付けて対岸に投げ、それを手繰って太綱を渡すという架設手順も記され、当時の橋の構造や施工法がよく分かる。

北斎は単に橋の外観だけではなく、構造原理や施工方法まで熟知した上で描いていたのである。さながら、レオナルド・ダ・ヴィンチが人物の写実性を高めるために、人体の構造を知ろうと解剖に没頭したかのごとくである。飛越の堺つりはしの構造は、蔦や木を鉄やコンクリートに代え、吊床版橋という構造で今も生き続けている。

3. 風景の記録者 歌川広重

江戸時代の浮世絵師で、北斎と並ぶビッグネームに歌川広重がいる。広重は天保4（1833）年、『東海道五十三次』シリーズを世に出す。これが

浮世絵空前の大ヒットとなり、以後複数の五十三次シリーズや、中山道を描いた『木曾海道六十九次』、全国各地の名所を描いた『六十余州名所図会』などが出版され、当時の風景や多くの橋の姿が後世に伝えられることになった。

このうち『六十余州名所図会』は、全国68カ国と江戸から1カ所ずつ名所を選出し描いたもので、この中に錦帯橋など11の橋も含まれている。

そのうちの1枚の「甲斐さるはし」（図-5）は、現在も山梨県大月市に残る猿橋（写真-4）を描いたもので、深い溪谷に架かる猿橋を、美しく紅葉した木々を配し大胆な構図で捉えた逸品である。

橋の構造は肘木橋といい、兩岸の岩中に斜めに



図-5 六十余州名所図会 甲斐さるはし



写真－4 現在の猿橋

木材を差し込み、これを支えに木材を張り出した現在のカンチレバー橋（ゲルバー橋）の一種である。絵では肘木が詳細に描かれている。この橋梁形式は、中国南部で生まれ東アジア一帯に広まったといわれ、山梨県では、610年頃に志羅呼（日本書紀に記されたペルシャ系土木技術者の路子工と同一人物との説がある）という百済からの渡来人が、多くの猿がつながり合って川の対岸へ渡っていく姿にヒントを得て架設したとの伝承がある。

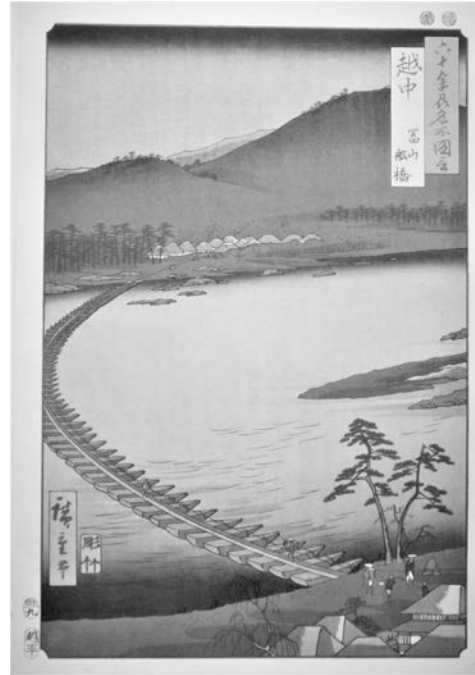
江戸時代には、岩国の錦帯橋、黒部の愛本橋（もしくは木曽の棧）と並び、「三奇橋」に数えられたことから有名となり、文人や画家が訪れ、詩や紀行文に多数記され、絵画も広重、北斎をはじめ多くの画家に描かれた。

「富山 船橋」（図－6）も『六十余州名所図会』に収められた1枚で、富山市の神通川に架設されていた船橋を描いている。

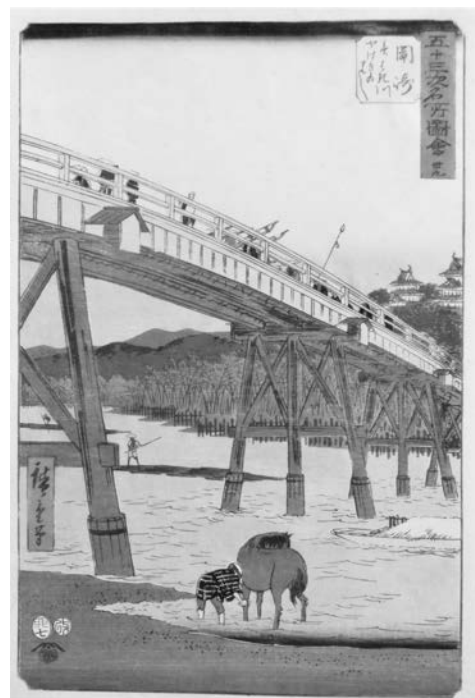
この橋は現在の富山大橋の前身で、北陸道が通っていた。船橋とは、船を並べ鎖で連結し、上に板を渡して橋にしたもので、絵では緩く弧を描く曲線が美しく描かれている。元和3（1617）年に前田利長によりはじめて架設された際には船は32隻であったが、後に64隻に増やされ、橋長は最長で400mに達したという。

この浮世絵に描かれたことで、神通川の船橋は広く全国に知られることになった。この橋は、明治15（1882）年に木造桁橋の神通橋が架設されるまで、江戸時代を通じて存続した。

『五十三次名所図会 岡崎宿 矢矧之橋』（図－7）は、大ヒットシリーズの初代『東海道五十三次』



図－6 六十余州名所図会 富山 船橋



図－7 五十三次名所図会 岡崎宿 矢矧之橋

から22年後の安政2（1855）年に、広重（初代）の筆による最後の東海道シリーズとして制作されたもので、描かれたのは現在の愛知県岡崎市に位置する、東海道が通る矢作橋である。

この橋の橋長は、江戸時代には船橋を除けば国内最長の360mを誇った。下から仰ぎ見るよう

な構図から、橋脚が詳しく描かれ、水際の腐食防止のための根包みや、橋脚横梁端部の腐食防止のための上棟木や雨覆板、梁鼻包板などの詳細な構造が分かる。

「東海道 京三條」(図-8)は、広重の娘婿である二代・歌川広重によって描かれた東海道五十三次シリーズの1枚である。東海道の終点、京都の三条大橋を描いたもので、橋脚をよく見ると細かい点々が書かれており、グレーに着色されている。これは橋脚が石造だったからで、構造を忠実に描いている。

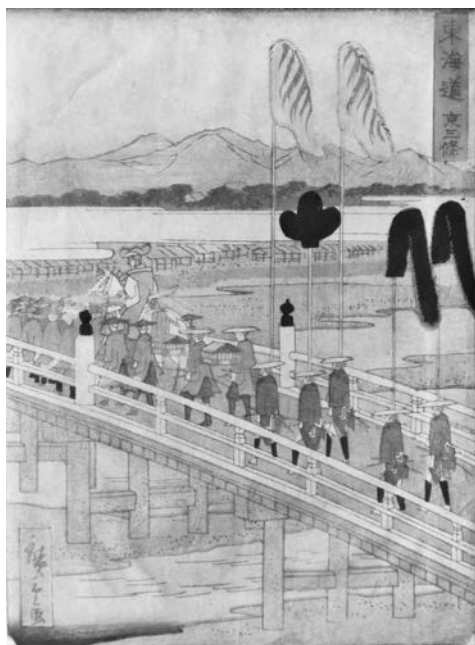


図-8 東海道 京三條

三条大橋がはじめて架設されたのは室町時代と伝えられるが、天正18(1590)年に豊臣秀吉の命を受けた増田長盛により架け替えられ、ほぼ現在の橋の原形がつくられた。この時の擬宝珠が現在も高欄に設置されている。

また架替え時、橋脚は石で造られ、1橋脚当たり3本の石柱からなっていた。この石柱は明治以降の架け替えで順次撤去されてきたが、現在も最下流側の一列だけは継続して使用されている(写真-5)。

なお撤去された石柱は、京都御苑内の高倉橋や平安神宮で再使用されているほか、京都国立博物



写真-5 現在の三条大橋 下流側の石造橋脚

館などに保存されている。

4. 絵師を魅了した橋の魅力とは

北斎や広重を魅了した橋の魅力とは何だったのだろうか。当時は考えられる精いっぱいの土木技術を駆使して橋が架けられていた。堺の吊橋や猿橋がそうであったように、それらは意匠で着飾ることはない構造力学そのものを具現化したものであった。

彼らは、この構造がつくり出す構造美に引かれたのだと思う。そして、『諸国名橋奇覧』や『六十余州名所図会』に描かれたように、地形に応じてさまざまな形式の橋が架けられたが、この構造の多様性も、彼らを引き付けたもう一つの理由だったと思う。

近年、我が国に架設される橋の形式は、アーチ橋やトラス橋や斜張橋などが姿を消して、桁橋一色になり、橋から多様性が喪失した。これは2000年頃を境にはじまった公共事業の経済性偏重と、それによって生み出された少数主桁など省力化桁の極端な採用が原因である。

今までの風景に橋が加わることで、新しい風景が生まれる。橋は100年以上存続し、地域の風景となる。単に経済性だけに左右されるのではなく、北斎や広重が生きていたなら描きたくするような、美しく多様性に富んだ橋を再び架けようではないか。

(写真・画像：筆者提供)